

図書紹介

James S. Colman(ed.); *Education and Political Development*. Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1965. xii+620p.

社会経済発展と教育というテーマは、最近ユネスコによって取りあげられている問題である。本書は政治発展と教育というプロボークな問題を提起し、これに直さいに切りこんでいるユニークな文献であり、注目に価するものといつてよい。

本書は、アメリカの社会科学学会の比較政治委員会の企画になるところの、「政治発展研究」叢書の第四集である。全体は、四部すなわち、教育的後進性のパターンと問題、政治優位の教育的発展のパターン、低開発国における近代のエリートの教育、教育計画と政治発展よりなり、おのおの数編、全部で17の論文がおさめられている。1962年6月、Lake Arrowhead で開催されたセミナーで、教育学者、政治学者および社会科学関係の学者が述べた所論がここにまとめられている。右の比較政治委員会のチェアマンである Lucian Pye 氏は、本書の序文で、このようなものを出す趣旨をつきのように述べている。「一国の発展における教育の重要性にもかかわらず、これについての研究があまり手がけられず、その間にギャップが存在する。アメリカの現在の対外援助のうち五分の一が教育のため消費されている。しかも低開発国においては、ヨーロッパ諸国におけるよりも高い比率の教育費が投じられているが、教育投資は依然として、従来どおりのありきたりのやり方で行なわれているのにすぎない。とにかく、政治と教育の関係は一般に閑却されている。このような理由から政治発展と教育という問題を取りあげた」といつているのである。実際、ここでは、一国の近代化の過程において、教育がいかなる役割を演じ、または演じうるのかということ、教育過程と政治の進展において、両者間にどのような相関関係が存するかということについて、真正面から取りくんでいるのである。

われわれにとって興味あるのは、本書において東南アジア諸国がどのように取りあつかわれているかということである。ところで、残念なことには、この地域はあまり取りあげられているとはいえない。すなわち、第一部の教育的後進性のパターンと問題の中で、インドネシアが、第二部の政治優位の教育的発展のパターンで、フィリピンが取りあげられているのにすぎない。インドネシアについて堂々たる筆陣をはっているのは、California 大学の小壮気鋭の比較教育学者、Joseph Fischer 氏である。インドネシア、ガジマダ大学に教鞭をとったこともある氏は、アメリカにおけるインドネシア研究において現在頭角をあらわしつつある人であり、私にとつても個人的に親しい友人である。インドネシアの教育を論ずるのには、本書の氏の所説をせひとも読む必要があろう。フィリピンについて述べているのは、Yale 大学で政治学を講ずる Carl Gandé 氏である。氏は有数のフィリピン通であり、フィリピンの政治についての著作もあるが、ここに述べられているのは、政治学者の立場から見たところのフィリピンの教育であり、そのような理由から、この国の政治および教育の関係について、前者にあまりに多くの bias がおかれているように見える。これはこれで、一つの所論であるが、フィリピンを政治優位の教育的発展が見られる国として、ソ連および日本と同列に取りあつかっていることは、氏の立場からは当然としても、客観的にそれほど説得力があるものであろうか。むしろ、この場合、タイなどが取りあげられるべきではなかったかと思われる。

同じ政治優位の教育的発展が見られる適例として、日本を論じているのは、われわれにとってなじみ深い Columbia 大学の Herbert Passin 教授である。われわれの東南アジア研究計画のよき理解者かつ支持者である氏は、豊富な資料を駆使して、日本の教育と過去における政治との関係、その近代化におよぼした影響などを論じてあますところがない。このような問題について論ずるに、これ以上の適任者はあまりないであろう。

(相良惟一)